

WISCからみた精薄児の知能特性

松 田 淳 之 助

はじめに

精神薄弱児（以下、精薄児という）とは、わが国では「種々の原因により、精神発育が恒久的に遅滞し、このため、知的能力が劣って云々」と定義され（1953年 文部省）、AAMD（アメリカ精神薄弱者研究協会）は1958年、「一般的な知的機能が明らかに平均より低く云々」と定義した。その外にも若干の定義づけがあり、その内容において多少の違いがある中で共通して言われていることは知的水準の低劣ということである。即ち、精薄児の知能の特性は、その知的水準の低さであることは論をまたない。しかしそれは、知的水準の低さという量的面のみではない。他の側面、即ち、質的面としての知能構造にも、その特色がみられるのである。我々は、それをより深く解明をしていくことにより精薄児の理解を深め、更にはより効果的な指導の手がかりをも究明していきたいと考える。

精薄児の知的水準、知能構造を解明していくのに最も多くなされている方法は、標準化された知能テスト法である。その中でも、1940年代から盛んに行なわれてきたのがビネー式知能テストであろう。それによる研究報告も数多く見聞するところである。しかし、このテストは精神年齢を算出することにウエイトがおかれ、知能構造の理解、把握にはやゝ難点がある。その把握に、現在最も有効とされ、重要視されているのがWISC（Wechsler Intelligence Scale for Children＝ウェックスラー法知能診断テスト）であろう。このテストはウェックスラーによって1949年発表されたもので、その発表以後、このテストによる精薄児の知能に関する研究が盛んに行なわれるようになった。

WISCは言語性検査と動作性検査の両検査からなり、前者は言語を主な媒介とするのに対し、後者は視覚と手先の運動機能を主な媒介としている。それぞれは、更に5つ～6つの下位検査から成っている。即ち、言語性においては一般的知識、一般的理解、算数問題、類似問題、単語問題、数唱問題などで、一般常識、判断力、表現力、記憶力など、比較的抽象的な思考能力をみようとするものである。それに対し動作性は絵画完成、絵画配列、積木模様、組み合わせ、符号問題などで、眼と手の協応、全体と部分の統合など比較的具体的な思考能力をみようとするものである。なお、言語性、動作性検査はそれぞれごとにIQが算出され、勿論全体としてのIQも算出されることはいうまでもない。なお、下位検査のそれぞれについては「結果」の中で今少しくわしく説明を加えることにする。

目 的

先にも述べたように、WISCによる研究は数多くあるが、その結果、一般的結論として述べられていることの多くは、精薄児は概して、言語性より動作性の方がすぐれている。また、下位検査についていえば「一般的知識」「算数問題」「単語問題」などの得点が低く、逆に「絵画完成」「絵画配列」などの得点がおおむね高い、などである。今回は、このような過去の諸研究との比較のもとに、更には、解答内容、反応等の分析も加え精薄児の知的特性を究明していきたいとするのが本研究の目的とするところである。

方 法

1. テスト対象児：県内A精薄児施設在園中の中・軽度精薄児30名を対象としたが、その内訳は表1の通りである。

表1 対象児内訳

知能段階	性別		男				女				全 体			
	年令		6	9	12	計	6	9	12	計	6	9	12	計
	6	9	未	未	未		6	9	未		未	未	6	
軽度児 (IQ50~IQ75)	1	3	7	11	2	3	4	9	3	6	11	20		
中度児 (IQ36~IQ49)	1	2	3	6	0	2	2	4	1	4	5	10		
計	2	5	10	17	2	5	6	13	4	10	16	30		

2. 手続き：このテストは個別の実施を旨としているため、施設内の心理検査室に1名ずつ入室させてテストを行なった。また、テストは原則として言語性、動作性の順に行なった。

結 果

以上のような手続きでテストを行なったが、その結果を言語性、動作性テスト別に集計し、更には、それぞれの下位テストごとに集計したので先ず、前者からのべてみたい。

1. 言語性 (V) と動作性 (P)

先ず、全体の傾向をみると、11の下位テストの平均評価点は3.8（本テストの評価点は20が最高点、0が最低点で10が中位）と非常に低く、これを言語性、動作性別にみると、前者は3.3、後者は4.5で後者の方がやゝ高いという結果がでた。これを更に軽度児、中度児と知能段階別にみても、いずれも表2に示す如く言語性、<動作性という結果がでた。

表2 知能段階別、テスト別評価点

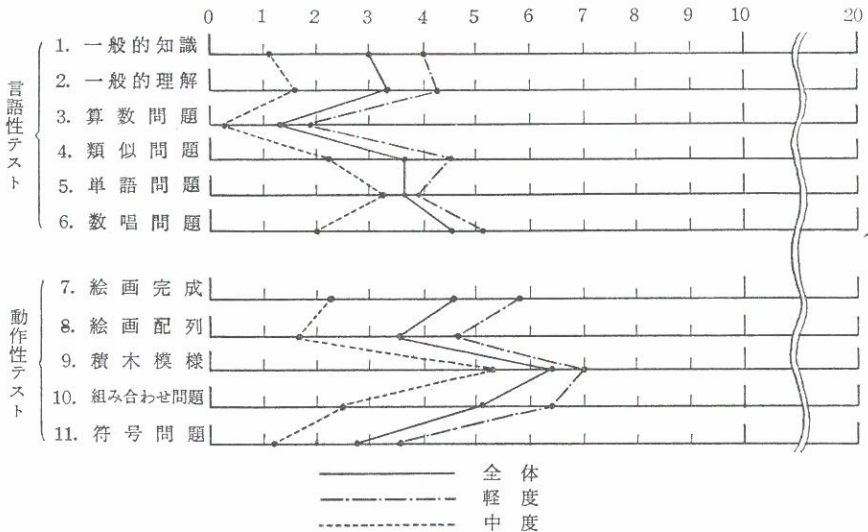
	言語性	動作性	全 体
軽 度	3.9	5.5	4.6
中 度	1.7	2.6	2.1
全 体	3.3	4.5	3.8

次に、言語性、動作性それぞれの下位テストについての評価点をみたのが表3であり、それをプロフィールで示したのが図1である。表3、図1で明らかなように、言語性では軽度児、中度児とも算数問題が非常に低く、軽度児においては数唱問題が比較的高かった。その他、平均より高かったのは一般的知識、一般的理解、類似問題等であった。それに対して中度児は単語問題のみがやゝ高い

表3 下位テスト別評価点

知能段階	テスト別 下位テスト	言 語 性						動 作 性				
		知識	理解	算数	類似	単語	数唱	完成	配列	積木	組合せ	符号
軽 度		4.0	4.2	1.9	4.5	3.9	5.1	5.8	4.6	7.0	6.4	3.6
中 度		1.1	1.6	0.2	2.2	3.2	2.0	2.3	1.7	5.3	2.5	1.2
全 体		3.0	3.3	1.3	3.7	3.7	4.5	4.6	3.6	6.4	5.1	2.8

図1 下位テスト別プロフィール



という以外は総体的に低かった。次に動作性テストをみると、軽・中度児とも積木模様が最も高く、他は、中度児の場合すべて平均以下という低さを示しているのに対し、軽度児においては組み合わせ問題、絵画完成がやや高かった。

以上、評価点による言語性と動作性の結果をみたが、次に、それぞれのIQの出現頻数という側面からみたい。即ち、言語性IQ-動作性IQを求め、その差10を級間とする分布図を作成した。それが図2である。この図をみて明らかのように、IQの+・-5以内が43.3%と最も多かった。続いて動作優位群の-6~-15が30%、-16~-25の16.7%、-26~-35の6.7%と続き、この3群を合計した動作優位群が53.4%と過半数を占めた。それに対して言語優位群は6~15が僅か1名、3.3%しかなかった。

この結果からも精薄児は動作性が言語性よりかなりすぐれているといえよう。

2. 下位テスト

以上、言語性テストと動作性テストの結果について評価点、IQの両側面からみてきたが、次に下位テストの結果をみてみたい。

(1) 一般的知識

「記憶の発達とその機能状態をみるためのスケールである。知的な野心、長期の把持力、文化的環境と関心とによって影響をうける経験の連合と体制化を知ることができる」(岡堂哲雄著、『基礎臨床心理学』P170)といわれるこのテストは、表4に示したように6番目の問「湯のわかし方」までは63.3%の正解がみられたが7番目以降は激減し、15番以降は正解者は皆無だった。(問題は全部で25問)また、一番簡単な「耳の数」の答えられない者が4名、13.3%も

図2 IQ差の分布(V-P)

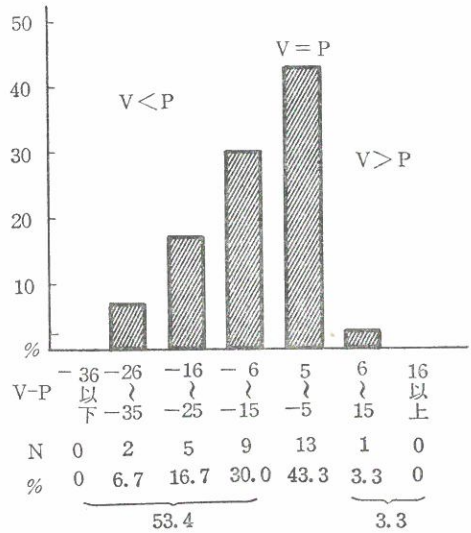


表4 一般の知識（正解者数及び正解率）

問	題	軽度	中度	全体	%
1	耳の数	17人	9人	26人	86.7
2	おや指の名	17	7	24	80.0
3	指の数	17	4	21	70.0
4	ミルクのもと	17	7	24	80.0
5	犬の足の数	16	3	19	63.3
6	湯のわかし方	15	4	19	63.3
7	砂糖を売る店	8	2	10	33.3
8	1ダースは	5	0	5	16.7
9	1週間は	5	0	5	16.7
10	四季の名	7	0	7	23.3
11	アメリカの発見者	1	0	1	3.3
12	太陽の沈む方角	6	0	6	20.0
13	胃の働き	5	0	5	16.7
14	真珠の色	1	0	1	3.3
15	「わが輩…」の作者	0	0	0	0
⋮	⋮	以下略（全部 0）			
25	⋮				

表5 一般的理解（正解得点及び正解率）

問	題	軽度	中度	全体	%
1	指をケガした時	34点	17点	51点	85.0
2	人のボールをなくした時	21	6	27	45.0
3	年少児がケンカしかけた時	18	4	22	36.7
4	店にパンがなかった時	14	0	14	23.3
5	鉄道が壊れているのをみた時	5	1	6	10.0
6	コンクリートの橋がよいわけ	13	2	15	25.0
7	罪人を刑務所に入れるわけ	0	0	0	0
8	貯金した方がよいわけ	7	1	8	13.3
9	洋服は毛織物がよいわけ	0	0	0	0
⋮	⋮	以下略（全部 0）			
14	⋮				

いた。

(2) 一般的理解

「ある状況を自動的にとらえ、適切で相応に反応する判断力を調べると共に、抽象的な推理作用、現実状況への反応が把握されよう」（前掲P.171）というこのテスト結果は表5に示したように、1番の「指をちょっとけがした時はどうしたらよいか」という問題だけは85%という高率の解答を示しているが、2番以下は激減し7番及び9番以下は解答率0となっている。また、解答内容も固定したと考えられるものが多く、彼等特有のとらえ方、考え方をしている様子がよくみられるが、このことについては後の考察の所でふれることにする。

(3) 算数問題

このテストは、いわゆる数能力をみるものだが、前掲の岡堂によれば「生産的活動への注意集中力と反応。抽象的レベルでの関係の分析力、先行経験や技能の選択と体制化、概念形成などがみられる」（前掲、P.172）というこのテストの結果は表6に示した通りである。即ち、9つの積木を数えることは、軽度児は殆ど可能だが中度児になると僅か3割に減少している。また、4番の「りんごを半分に分けると幾切れになるか」という問題までは大体6～7割の正解者がいるが、5番以降の、いわゆる計算問題になると途端に正解困難となり、8番以降は正解者皆無で、下位テスト全部の中でも算数問題の評価点が最も低かった。このことから精薄児にとって算数問題は最も不得意なもので

表6 算数問題（正解者数及び正解率）

問	題	軽度	中度	全体	%
1	積木9つの数唱	18人	3人	21人	70.0
2	積木4つと5つに分括	18	4	22	73.3
3	積木7つと2つに分括	16	2	18	60.0
4	りんごを半分に分けると	17	5	22	73.3
5	4円+2円	10	0	10	33.3
6	8つ+6つ	7	0	7	23.3
7	12本-5本	5	0	5	16.7
8	7円×3本	0	0	0	0
⋮	⋮	以下略（全部 0）			
16	⋮				

あるということがいえよう。

(4) 類似問題

このテストは、「夏みかんはすっぱいが、砂糖は？」というように3番までは反対類推、4番以降は類似点、共通点の発見という問題で、「関係の分析力、具体的機能的レベル及び抽象的レベルにおいて形成されるもの、諸事実の関係、世界をどのように見、事物をいかに関係づけるかをテストする」(前掲, P.172)ものであるが、そのテスト結果は表7に示したように、1・2番は正解率70%代とかなり高いが、3・4番になると過半数を割り、5番以下になると1割以下という低さである。特に、中度児は正解者皆無といっているほどに激減している。また、その解答も満点の2点を答えた者は僅か2名(梨と桃の共通点を「果物」、鋏と鍋の共通点を「金物」と解答)しかいなかった。

表7 類似問題 (正解得点及び正解率)

問	題	軽度	中度	全体	%
1	夏みかん—砂糖	17点	5点	22点	73.3
2	歩く—持つ	15	6	21	70.0
3	男—女	12	2	14	46.7
4	ナイフ—ガラス	11	2	13	43.3
5	猫—鼠	8	0	8	13.3
6	着物—洋服	2	1	3	5.0
7	ビール—酒	4	0	4	6.7
8	ピアノ—バイオリン	2	0	2	3.3
9	鋏—鍋	2	1	3	5.0
10	紙—石炭	2	0	2	3.3
11	梨—桃	7	1	8	13.3
12	メートル—キログラム	2	0	2	3.3
13	山—川	0	0	0	0
∴	∴	以下略(全部0)			
15	∴				

(5) 単語問題

「文化的機会(教育)によって影響をうける言語の発達程度。記号処理の潜在能力。記憶と概念形成。記憶の体制化と効率。総合知能と非常に相関の高い下位尺度である」(前掲, P.173)というこのテストは更に表現能力をも示唆すると思われるが、その結果は表8に示したように、どうにか正解が得られたのは30問の問題の中僅か10問、 $\frac{1}{3}$ でしかなかった。それも、満点の2点となる解答をした者は僅か2名(2名とも「森」に対して「木がたくさん生えている所」と答えた)にすぎなかった。あとは、例えば「座ぶとん」は「すわる」。「時計」は「みる」。「こうもり傘」は「さ

表8 単語問題 (正解得点及び正解率)

問	題	軽度	中度	全体	%
1	座ぶとんとは?	16点	4点	20点	33.3
2	時計 //	7	1	8	13.3
3	こうもり傘 //	11	4	15	25.0
4	電車 //	4	2	6	10.0
5	自転車 //	3	1	4	6.7
6	マフラー //	8	0	8	13.3
7	そろばん //	8	0	8	13.3
8	公園 //	10	1	11	18.3
9	森 //	6	0	6	10.0
10	新聞 //	1	0	1	1.7
11	噴火 //	0	0	0	0
∴	∴	以下略			
30	∴				

表9 数唱問題 (正解者数及び正解率)

	軽度	中度	全体	%	
順	3 桁	9人	3人	12人	54.4
	4 "	8	1	9	40.9
	5 "	1	0	1	4.5
	6 "	0	0	0	0
	∴	以下略			
逆	0 桁	3	3	6	27.3
	2 "	5	1	6	27.3
	3 "	9	0	9	40.9
	4 "	1	0	1	4.5
	∴	以下略			
唱	∴				
	8 "				

す」など0点かせいぜい1点の解答ばかりで、正解率も最高が「座ぶとん」の33.3%にとどまる、という非常に低いものとなった。

(6) 数唱問題

このテストは、聴覚的、直接的、機械的記憶力とあわせて注意力をみるテストであるが、正常児の標準としては順唱の場合3桁は3才半。4桁、4才半。5桁、7才。6桁、10才とされているが、精薄児の場合、表9に示すような結果となった。これからみると順唱は4桁まで、逆唱は3桁までしかいえず4才児程度の記憶力しかないということがいえよう。また、逆唱においては3割弱の被験者に無答がみられたが、これはその意味の理解不能によるものが殆どであった。

(7) 絵画完成

このテストは、それぞれの絵の中から足りない所、欠けている部分を指摘する（例えば、1番の櫛の絵の場合、歯が1本欠けている）問題で、全部で20枚の絵カードから成っており、これは「視知覚の問題であり、環境的な経験や視覚の鋭敏性、視的な洞察力などによって影響をうける分析力と心象、最も重要な機能は、注意の集中であり、注意を焦点化することが求められる」（前掲、P.174）問題であるが、このテスト結果は表10に示したように、6番の「手」（これは小指の爪がない）までは6割以上の正解率を示したが7番以降のような、欠陥箇所がかなりこまかい絵になると正解率は急激に減少し、特に中度児に至っては皆無に等しい状態になってしまっている。

(8) 絵画配列

この問題のAからCまでは3片又は4片に切り離された絵を組み合わせて一つの完成された絵とするものであり、D以下は3片から6片の絵を一つのお話しになるよう並べさせる問題で、これは「視覚的な関係の知覚、視覚的鋭敏性と最小の文化的機会によって影響をうける非言語的素材の統合、計画性と予期の能力、視覚的体制化」（前掲、P.176）如何をみる問題とされているが、このテスト結果は表11に示した通りである。即ち、問題AからCまでのような、切り離された絵を組み合わせる、いわゆる、絵の平面的な連続は正解率も高かったが、D以下のような一つの話しにまとめる、いわゆる、時間的変化の配列になると途端に正解率が低下し、これも、特に中度児においては皆無に近い状態となっている。また、カード枚数の多い6番、7番（いずれも6枚）は正解者は1名もいなかった。

(9) 積木模様

この問題は、A～Cは実物で、1～7はカードで示された見本と同じ模様をつくらせるもので、「形態知覚の問題、視覚運動的な統合、視覚と運動の協応、視覚的な洞察による諸部分の相互関係の知覚、視覚的な分析と統合」（前掲、P.175）能力をみるものとされているが、こ

表10 絵画完成（正解者数及び正解率）

問	題	軽度	中度	全体	%
1	櫛	20人	10人	30人	100.0
2	狐	19	7	26	86.7
3	少女	17	8	25	83.3
4	テーブル	17	6	23	76.7
5	猫	17	6	23	76.7
6	手	14	6	20	66.7
7	ハサミ	12	1	13	43.3
8	ドア	8	2	10	33.3
9	カード	7	0	7	23.3
10	ねじ釘	9	0	9	30.0
11	寒暖計	7	1	8	26.7
12	コート	4	0	4	13.3
13	帽子	2	0	2	6.7
14	おんどり	4	0	4	13.3
15	横顔	4	0	4	13.3
16	魚	4	0	4	13.3
17	こうもり傘	2	0	2	6.7
18	牛	0	0	0	0
19	木	1	0	1	3.3
20	蠅	0	0	0	0

表11 絵画配列 (正解者数及び正解率)

問	題	軽度	中度	全体	%
A	犬	20人	8人	28人	93.3
B	母	20	9	29	96.7
C	汽 車	15	5	20	66.7
D	は かり	10	3	13	43.3
1	火 事	9	2	11	36.7
2	泥 棒	10	1	11	36.7
3	農 夫	10	1	11	36.7
4	ピクニック	8	1	9	30.0
5	朝 寝 坊	7	0	7	23.3
6	庭 師	0	0	0	0
7	雨	0	0	0	0

表12 積木問題 (正解者数及び正解率)

問	題	軽度	中度	全体	%
A		19人	8人	27人	90.0
B		18	7	25	83.3
C		18	6	24	80.0
1		8	1	9	30.0
2		6	0	6	20.0
3		2	0	2	6.7
4		7	0	7	23.3
5		4	0	4	13.3
6		2	0	2	6.7
7		0	0	0	0

のテストは11の下位テストのうち最高評価点を得たもので、その結果は表12に示した通り、最後の問題以外はすべて正解者がいたのである。A～Cの実物で見本が示されたものは大多数が解答をしているが、カードの見本になると正解者は急激に減少しており、中度児においては1番に1人いただけで2番以下は皆無となっている。しかし、軽度児にあっては積木の数がそれまでの4コから一挙に9コにふえた5、6番の問題においてもそれぞれ4名、2名の正解者がみられたのである。最後の問題も時間がオーバーしたけれど正解に達した者もいた。(このテストは時間制限法で、時間内に出来なければ失敗とみなす)

(10) 組み合わせ問題

この問題は、いくつかの断片を組み合わせることにより、一つの完成された絵とするもので、人形(5片)、馬(6片)、顔(8片)、自動車(7片)の4つの下位テストから成っている。これは、「視覚量と統合力、視覚運動的な統合性、視覚的な洞察による意味形成と抽象作用、意味をもつ諸部分から全体様式を予想する能力、適切な予期の力とスムーズな視覚運動的な協応を要するテスト」(前掲、P.177)で、いわば部分と全体の統合能力をみるものとされ、このテストは出来具合によって得点が算出されるようになっている。それぞれ下位テストごとにその得点を表にしたものが表13の①、②、③、④である。①の人形は比較的容易な問題とされているのに、どうにか正解の域に達した者(4点以上)は14名、46.3%と半分に満たなか

表13 組み合わせ

① 人形 (正解者数及び正解率)

得 点	軽度	中度	全体	%
0	1人	1人	2人	6.7
1	0	1	1	3.3
2	0	2	2	6.7
3	7	4	11	36.7
4	7	1	8	26.7
5	4	1	5	16.7
6	1	0	1	3.3
7	0	0	0	0

② 馬 (正解者数及び正解率)

得 点	軽度	中度	全体	%
0	6人	4人	10人	33.3
1	2	2	4	13.3
2	3	4	7	23.3
3	1	0	1	3.3
4	0	0	0	0
5	4	0	4	13.3
6	3	0	3	10.0
7	1	0	1	3.3
8	0	0	0	0
9	0	0	0	0

③ 顔 (正解者数及び正解率)

得点	軽度	中度	全体	%
0	2人	4人	6人	20.0
1	4	3	7	23.3
2	1	1	2	6.7
3	6	1	7	23.3
4	0	0	0	0
5	2	0	2	6.7
6	2	1	3	10.0
7	1	0	1	3.3
8	1	0	1	3.3
9	1	0	1	3.3

④ 自動車 (正解者数及び正解率)

得点	軽度	中度	全体	%
0	4人	3人	7人	23.3
1	1	2	3	10.0
2	1	2	3	10.0
3	0	1	1	3.3
4	3	2	5	16.7
5	6	0	6	20.0
6	4	0	4	13.3
7	1	0	1	3.3
8	0	0	0	0
9	0	0	0	0

った。最も多かったのは両足の左右取り違えで11名、36.7%もいた。足の長さが違い、一見何でもないように見える箇所を間違えているのである。②の馬の問題になると全く解答しえなかった者が、4つの下位テストの中で最も多く、10名、33.3%もいた。馬としての組み合わせがどうか出来た者は軽度児のみ僅か4名、全体の1割強にしかすぎなかった。残りは、胴が逆、前足と後足が逆、前足のみ正解といったような部分的正解をなしたにとどまった。次の、③の顔の場合は得点に大きなひらきがみられた。即ち、全く出来なかった者が6名、2割いるかと思えば最高得点をとった者も1名おり、その間、4点が1名もいなかっただけで他は1から8点まで各得点とも1名以上の者がいた。そのうち最も多かったのが、1点と3点の各7名である。最後の④、自動車も全体の傾向は③の顔と同じように0点から7点までとばらつきがはげしかった。が、どうか正解の域に達した者(6点以上)はいずれも軽度児のみ5名、16.6%にすぎず、残りのうち7割は部分的正解で、全く不能だった者が7名、23.3%もいた。また、その組み合わせ方も①～④とも殆ど試行錯誤的であった。

(II) 符号問題

この問題は、1～9までの数字のそれぞれに決められた符号があり、その符号を2分間にどれだけ沢山記入するかをみるもので、視覚と運動の協応、直接記憶の再生、ならびに集中力をもみようとするテストであるが、その結果は表14に示した通りである。これは当然、年齢が増せば試行数も増すわけで、従って試行数が同じでも年齢によって評価点も異なることになる。そこで、本表の場合は一応対象児の平均年齢が12:2才なので12才児級の得点表を用いてまとめてみた。すると、試行数15以下(得点、0)が4割弱も居り、最高は39で40以上は1名も居らず、全体の評価点平均も2.8と非常に低かった。即ち、視覚と運動の協応動作は非常に緩慢である、ということがいえよう。

表14 符号問題(正解者数及び正解率)

得点(試行数)	軽度	中度	全体	%
0 0～15	5人	6人	11人	37.9
1 16～19	0	1	1	3.3
2 20～23	3	0	3	10.0
3 24～27	5	1	6	20.0
4 28～31	3	1	4	13.3
5 32～35	1	0	1	3.3
6 36～39	3	0	3	10.0
7 40～43	0	0	0	0
8 44～47	0	0	0	0
9 48～51	0	0	0	0
10 52以上	0	0	0	0

考察とまとめ

以上、中・軽度の精薄児30名を対象に行なったWISCの検査結果の概略をのべたが、これ

らの結果をもとに考察をくわえていく。先ず、言語性、動作性のテスト結果からのべていく。

1. 言語性、動作性の比較、検討

このテストは前にも述べたように、言語性、動作性それぞれ別々にIQが算出できるようになっており、それを比較、検討することによって精薄児の知能構造、特性を把握しようとしているが、今までの研究報告は、大体一致して動作性優位という結果となっている。筆者のテスト結果も、表2、図2に見られる如く、評価点、IQとも動作性優位という結果となった。精薄児の場合、何故動作性が優位であるか、ということについて色々な見解が述べられている。即ち、品川不二郎は、パーソナリティの上層に言語性知能を、下層に動作性知能を位置させ、パーソナリティの知的要因は言語的な抽象的知能で、下層の知的要因は具体的生活的能力を主とする動作面の知能で、精薄児は後者が優れているとしている。また、狩野広之は、テスト実施上の難易によるという方法論から動作性の優位性を説明している。これらの総括的見解として大西憲明は、「言語性にしろ、動作性にしろ、基本的には言語が必要であるが、動作性の検査では自己一言語化が動作に随伴する思考の形をとっても、言語自体の操作による思考過程が直接的に必要とされなため、それだけに精薄児にとってはかなり容易である。しかも、言語性検査において言語的に応答する過程よりも、動作的に解決した過程では、直観的にも自らの応答過程や成果が評価される機会が多いだけ、課題作業に対する彼等の態度も検査状況に即応して現実的、能動的となり、したがって、結論的には言語性検査に比較して動作性検査の成績がすぐれたものになる。」と述べ、動作性の優位を説明している。たしかに、彼等のテスト態度を見る限り、言語性テストの場合は、すぐに「わからん」と言ったり、いかにも自信なさそうに、蚊の鳴くような声で答えたり、考えるのが面倒臭い、といったようなげやりのな応答がはね返ったり、いかにも大儀そうに、いやいや、しぶしぶといった態度だったり、総体的に受動的、消極的で思考活動の乏しさもありありと見受けられた。それに対して動作性テストになると、一部の者を除きその多くは黙々と、熱心に取り組み、総じて、能動的、積極的であった。しかし、そのプロセスは洞察的というより、むしろ、試行錯誤的、あるいは偶然ともいえるような解決をなした者もみられた。これらのことから、動作性優位の原因として考えられることは、すでに紹介した諸家の見解の外に、テストに対する取り組みの姿勢（言語性の場合には受動的、消極的姿勢、動作性の場合には、能動的、積極的かつ意欲的姿勢）、思考活動、生活経験の貧弱、それに動作性の場合、試行錯誤的解決、偶然的解決の可能性、機会を有するという点などであろう。

しかし、その動作性も、言語性に比し相対的に優れている、ということだけであって、これを全体的、客観的に眺めてみるならば、表2にも示したように、軽度児でも評価点平均は5.5と、その段階は普通の半分しかなく、それはまた、筆者が以前精薄児の知的行動に関する研究として行なった課題解決場面における彼等の行動観察からも、その低劣さがうかがわれた。即ち、その具体的思考において洞察的解決をなした者は、棒1本を使用する、という最も簡単な場面で28%、棒3本をつぎたす、というやや困難な場面になると僅か5%にすぎなかった。逆に、解決不能者は前者で68%、後者は88%もの多きに達し、具体的思考の低さを如実に物語る結果となった。要するに、精薄児は総体的には言語性、動作性とも低劣であるということは論をまたない。両能力とも少しでも高め、促進させるには知的活動をより活発化させるような配慮を怠らないこと、課題解決場面をより多く与えること、知的刺激もより多く与えること、社会生活経験をより豊富にさせること等が考えられねばならないであろう。

なお、本テストの結果では、図2に示したように動作優位群 ($V < P$) が53.4%と全体の過半数を占め、同位群 ($V = P$) も43.4%いたのに対し、言語優位群 ($V > P$) は僅か3.3%し

かいなかった。それに対して品川不二郎の結果は、 $V < P$ 群が42.1%、 $V = P$ 群が31.6%と両者とも筆者のより1割強少なかったが、 $V > P$ 群のみは26.3%、特に6～15の群が20.6%とそこに大きな違いをみることが出来る。その差の原因として考えられることは、一つには対象児数の違いがあげられよう。即ち、筆者の場合は僅か30名であるのに対し、品川の方は574名という多きにのぼっている、ということである。しかし、そのうち、ウエックスラーが「境界線級」としているIQ70～79の者は、筆者の場合、4名（IQ72, 3名, IQ75, 1名）しか含まれていないのに対し、品川の場合は171名、29.8%と3割も含まれ、更にIQ80代が56名、9.8%、IQ90代以上の正常知能を有する者も24名、4.2%も含まれているのである。そして、「言語優位群においては言語性IQは11.90の差をもって動作性よりすぐれており、その水準は境界線級である。」と述べているように、言語優位群の殆どは、知能水準の比較的高い境界線級以上の者と考えられる。これが、その差の原因の第二点と考えられる。なおまた、品川の場合、言語優位群は境界線云々、と結論づけているが、筆者の場合の4名についてみてみると、同位群2名、動作優位群2名で、言語優位群は1名もいなかった。筆者の場合、言語優位群のみられた1名は中度児で、言語性IQ47、動作性IQ41だった。このことからみても、言語優位群は必ずしも知能水準の高い者にみられるとはいいきれず、精薄児といえども大なる個人差があるということを示唆するものといえよう。

次に、下位テストについては、過去の研究結果では前にも述べたように、一般的知識、算数問題、単語問題などの得点が低く、逆に絵画完成、絵画配列などの得点がおおむね高い、と報告されているが、本テストの結果では、表3、図1からも明らかなように、低いのは、算数問題、絵画配列、それに符号問題などであり、逆に、類似問題、数唱問題、積木模様、組み合わせ問題などがおおむね高かった。その中、特に顕著だったのは算数問題の低さと、積木模様の高さであろう。これらより、過去の結果と一致しているのは算数問題だけで、絵画配列は逆の結果となり、全般的には不一致な結果が目だつと言えるだろう。このような結果となった背景を考えてみると、先に、言語優位群の差の開きについて述べた原因と同じようなものが考えられると思う。即ち、対象児数の違い、知的水準の違い、それに、対象児そのものが異っているということ、そのことはとりもなおさず、精薄児自身の個人差もすくなく存在している、ということにほかならない。が、これらは、下位テスト一つづつについて考察、検討してみたい。

2. 下位テストの検討

(1) 一般的知識

軽度児は、言語性の平均と殆ど差のない評価点得点を占めることができたが、中度児の場合のそれはかなり低い得点にとどまっている。また、各問題の正解率も表4から明らかなように6番までは身近かな問題が殆どで直接経験の機会、指導をうけた機会も多かったであろうということから、比較的高い率を占めているが、7番目の「砂糖はどんな店で買うか」は、直接経験者は殆どなく、その必要性もないなどから、また、8番以降は抽象性が高く、知ることの意義も殆ど持たない、などの理由から正解率は急激に低下してきている。これを総じて言えば、文化的関心、知的好奇心の低さを如実に物語るものであろう。今後の課題としては、身の周りの現象、社会的現象等を、彼らとのかかわりにおいてとらえさせ、いかにして文化的関心、知的好奇心等を少しでも高めさせていくか、ということであろう。

(2) 一般的理解

この問題の1番「指をちょっとけがした時はどうしたらよいか」という問の正解率は85%と高率だったが、その殆どは「治療をする。——赤チンつける。」という解答で、これは、彼等が

施設生活の経験で1日1回、治療の時間があり、「治療」という言葉を毎日耳にしており、その多くは、具体的内容を十分把握していることによるものと考えられる。2番以下は正解率が激減しているが、少ないながらその解答をみると、2番の「ボールをなくした時は？」は「さがす」が多かった。これは、施設内でよくソフトボールボールなどするが、ボールがくさむらなどにはいった時は必ず皆で探された。3番の「小さい子が、ケンカしかけてきた時？」は、「せん」、「先生にいう」が多かった。これは、始終「ケンカはしないよう。そんな時は先生に言うよう」教育を受けてきたことが大きく影響しているものと考えられる。4番の「パンを買いに行ったが、品切れでなかった時は？」は「なかった、と言って帰る」が多かったが、これも次の指示を先生に仰ぐという姿勢が強くうかがわれ、自主的判断傾向、適応性があまりみられなかった。これは、彼ら特有の硬さというより、施設での教育効果の影響が、多分ににじみでたものと推察される。この問題は、常識的な判断能力を調べる問題であり、そしてそれは、多分に社会的、文化的な過去の経験に依存されるものと考えられるところから、教師等がすぐ指示を与えるというようなことはせず、このような経験の場を数多くふませる、ということが肝要なことではなからうか。

(3) 算数問題

このテストは、11の下位テストの中で最もアヴァレージの低かったものであり、彼等の最も不得意とするもので、抽象的思考能力の低さを単的に物語るものである、ということがいえよう。8番の「1本7円の鉛筆は3本で幾らか」という問題の正解者は皆無（「わからん」、不答が最も多く、反応したのは僅か4名だったが、その4名の答えは、28円、28円、16円、3円だった）だった。その彼等も掛算の九九はおおむね言うことが出来るのである。ということは、九九はたゞ単に、機械的記憶しているに留まり、数的処理に際し、それを活用する、という、岡堂のいう「先行経験や技能の選択と体制化、概念形成」などが殆どみられない、ということになる。彼等への数的指導に際しては、このような特性を十分に留意してあたねばならない。

(4) 類似問題

このテストは5番以下の得点を2点、1点、0点と、3種に分け（4番までは1点、0点の2種のみ）その解答が本質的なものをついた場合は2点、属性のみあげた場合は1点としているが、そのような問題になった途端、表7で明らかなように、正解率が低下している。例えば5番の「猫と鼠の共通点」の場合、2点満点の「動物」と解答した者は1名も居らず、「しっぽがある」「眼・口・ひげ・鼻・足・毛がある」などの属性——部分的・具体的部分の指摘をしたにとどまった。このことは、彼等の抽象的類推能力、関係把握、概念形成能力などの低さをよくあらわすものといえよう。

(5) 単語問題

このテストの得点も2点、1点、0点の3種に分けられるものであるが、結果のところでも述べたように、満点の2点解答をした者は2名にすぎず、他は全部、「座ぶとん」は「すわる」、「時計」は「はめる」「時間をみる」、「こうもり傘」は「さす」、「電車」・「自転車」は「のる」といったように、部分的、具体的用途を述べたに留まり、抽象的、論理的思考能力の低さ、記号処理の潜在能力の低さなどを示すものといえよう。

(6) 数唱問題

このテストは、直接的、機械的記憶能力をみるものであるが、軽度児の場合、言語性テストの中で最も高い評価得点を占めた。が、その内容は、せいぜい順唱で4桁、逆唱で3桁どまりである。これらのことをふまえ、彼等への指導上の配慮としては、出来るだけ、直接経験にう

ったえ、同じ材料を反復して与える、その材料も、より具体的なもの提示するといったようなことが考えられよう。

(7) 絵画完成

このテストは、得点が低かったという報告もあるが、本テストの場合は大体平均値のあたりを占めた。このテストに用いられた20枚の絵はどれも一度は眼にしたことのある、比較身近なものばかりであるが、それだけに、漠然と見すごされてしまう可能性もある。したがって、このテストのねらいは、視覚の鋭敏性・洞察力、注意の集中性などとなるが、このテスト結果は表10で明らかなように、一見してそれとわかる1～6までの正解率がかなり高かったのに対し、欠陥箇所がこまかくなり、十分な注意を向けねば、また、その物の完全な姿、状態が把握されていなければ正解が得られにくくなった7番以降（ハサミー「ねじ」、ドア「蝶つがい」、カード「真中のスペード」、ねじ釘「真中の溝」等）になると正解率は急激な減少をみせている。そして、無答も多いが、まとはずれな誤答もふえてくる。たとえば8番のドアの場合、戸があいている、カギ、ガラスがないなど。その他、「わからん」、「皆ある」といったような解答もかなりみられ、事物を適確に把握しようとする意欲、集中力等の乏しさ、視覚の鋭敏性・洞察力などの低劣等がうかがえよう。彼等に対する、事物の適確な把握を、視覚だけでなく、触覚、聴覚等他の感覚器官も動員の上でなさしめなければならない。また、日常生活において観察眼を養い、高めるような配慮が常になされなければならない、と考える。

(8) 絵画配列

これは、表11からも明らかであり、結果のところでもふれたように、AからCまで、つまり、絵の平面的な連続の正解率は高かったが、D以下のような時間的変化の配列になると、正解率の低下がみられた。この問題は、時間的変化をどの程度正確に把握できるかどうかをみようとするもの、換言すれば、全体的な事態を理解し、判断する能力をみようとするものと考えられるが、彼等は、そのような能力もかなり低いものでしかない、と考えられる。中には、何枚かの絵が連続的なものと見えず、1枚1枚をそれぞれ独立した意味のある絵と解釈している者すらいたのである。このような彼らに対しては、簡単な原因—結果という因果関係の理解を深めていく学習が不可欠なものと考える。

(9) 積木模様

このテストは、11の下位テストのうちで、最高の評価得点を得たもので、軽度児の場合は7.0と平均値の10にかなり接近した数値を占めた。ということは、諸部分の相互関係の知覚、視覚的な分析と統合能力がかなり高い、ということを示唆しているように思われる。ところが、個々の問題の内容吟味をしてみると、A～Cの実物の場合は高正解率を示したのに対し、1～7のカードによる見本になると正解率は30%以下に急落し、その試行過程も積木をいじくりまわしているうちに、偶然その部分があらわれた、といったような試行錯誤的、偶然的解決が大部分で、先の能力の高さは疑問視せざるを得ないのである。

(10) 組み合わせ問題

このテストは、先の積木模様が続く高得点を得、「顔」の問題では最高得点9点をとった者さえいた。全体的にばらつきが顕著にみられるが、表13にみられるように、②～④においては得点0も20%以上あり、特に「馬」の場合は33.3%もいた。このテストは、バラバラになっている何片かの部分を組み合わせるといかなる物となるか、という洞察力、統合能力、部分から全体様式を予想する予知能力等が要求される場所であるが、「人形」「顔」等は比較的容易に予知が可能と考えられる。それに対して、「馬」「自動車」等はやゝ困難となり、特に前者は、最近彼等の身近から遠のいている関係もあって、困難性は一層顕著となっているようであ

る。最も簡単と思える「人形」はさすがに0点は、僅か中度児に1名(3.3%)とすくなくしたが、さりとて、正解の域に達した者も14名(46.3%)と半分に満たなかった。最も多い誤りは左右の足のつけ違いで、見れば明らかに左右不揃いであることが判る筈なのに、無雑作に組み合わせるだけで、あと、それが正確であるかどうかの確認の作業を省略してしまっているのである。ということは、とりもなおさず、先に述べた、洞察力、統合能力、予知能力等の弱さを物語るものである、ということが言えよう。

(II) 符号問題

このテスト結果も、表14で明らかなように試行数15以下が11名(37.9%)の多きに達し、最高でも39で評価点でも6点と、かんばしいものではなかった。このことは、手先の運動機能の遅滞のほかに関係把握能力、弁別、記憶能力等の低さを意味し、更に、結果のところでも述べたように、視覚と運動の協応動作が緩慢であり、更に、集中力のとぼしさもうかがえよう。

以上、テスト結果をもとに、言語性と動作性の比較、11の下位テストの項目別考察を加えてきたが、これらを総括的に要約してみると、言語性と動作性との比較では、いずれも評価点は低得点ながら動作性が優位であることが判明した。その原因としては、動作性の方が彼等の興味をそそり、概して能動的、積極的、意欲的にとりくんだという、テストに望む姿勢の差、また、動作性の場合、試行錯誤的、偶然的解決の機会が得られたこと、逆に、言語性テストにおいては、思考活動の乏しさ、生活経験の貧弱さなどがわざわざいたことなどが考えられよう。これらのことより、知的面からの彼等への配慮としては、知的活動の活発化、知的刺激の付加、社会生活経験の豊富化、言語活動の豊富化等々が考えられねばならないのではなからうか。

次に、下位テストからは、知的好奇心、文化的関心が非常に乏しい。総体に依存傾向が強く、自主的、積極的に課題に立ち向かう姿勢に欠けると共に、生活経験の乏しさからか、常識的判断力も欠けている。論理的、抽象的思考能力は極めて低劣であり、推理能力、表現能力も極めて貧弱である。直接的、機械的記憶能力も3~4才程度のものでしかない。注意の集中性、身の事象、社会現象等への観察眼、鋭敏性、洞察性等も殆ど持ち合わせていない。課題解決のための行動は試行錯誤的である。指先運動能力も乏しく、認知、弁別能力も低次のものでしかない、等々が指摘されよう。以上のような、彼等の知能構造の一般的特性をふまえ、これら、諸能力をいかにすれば少しでも向上させることが可能かを常に念頭におきながら接することが大切なことと考える。

以上のような一般的傾向もさることながら、最後に、個人差を無視してはならない、ということをつけ加えておきたい。言語性IQ65、動作性IQ81、全検査IQ69の、ある軽度精薄児の場合、算数問題の評価点は1と最低の得点しかなかったが、数唱問題、一般的理解は共に6、類似問題は8、積木模様は11と平均値より高い得点をとっている。この例のように、一人一人の能力の内容は決して単調ではないのである。精薄児全体を十把一からげにしたような見方、考え方は決して、してはならず、何が劣り、何がすぐれているかという、個人の知的特性を十分に把握するよう努め、指導にのそむべきであろう。即ち、精薄児の指導、教育に際しては、森を見て木を見ず、ということがないよう、個々人の知能構造上の、ひいては、パーソナリティの特性が十分生かされるような配慮がなされなければならないと思うのである。

今回は、対象児数が30名と少なく、これだけの数のテスト結果から結論づけることは早計かも知れない。また、性差の検討も、男子17名、女子13名と少なかつたため全くふれずじまいに終えてしまった。今後、対象児数をふやし、性差をふくめより深く精薄児の知能構造特性を究めていきたいと考えている。

引用文献

- 伊藤隆二著 精神薄弱児の心理学 日本文化科学社 1964
岡堂哲雄著 基礎臨床心理学 萩書房 1967
品川不二郎 精神薄弱児教育の基本問題（東京学芸大学教育研究所 第8年報）学芸図書KK
1961

参考文献

- 全日本特殊教育連盟編 精神薄弱児講座（3）日本文化科学社 1973
児玉省・品川不二郎共著 WISC知能診断検査法 日本文化科学社 1974
松田淳之助 精神薄弱児の知的行動に関する所究 岡本春一先生退官記念論文集 1964

昭和52年3月31日受理